

万葉の川心まんようかわごころ柿本朝臣人麿の死ひまつかりし時に、妻の依羅娘よまのをら子の作れる歌

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第二 二三四番歌)

今日けふ今日けふと わが待つ君は 石川いしかわの貝かひに

交じりてありと いはずやも

「待つ」ということに、耐えられる人と耐えられない人がいる。美味しいもののためなら、たとえ長時間行列に並んでも食したい人。味は少し落ちたとしても、すぐに座れる店を探す人。遊園地のアトラクションに表示された六十分待ちに諦める人、全く気にせず並ぶ人。恋しい人への片想いをゆつくり抱いている人、当たって砕けてなんぼですとばかりに声をかける人。メールの返事がすぐに出来ないなら、メールをやる資格はないよと連れ合いに言われたが、「OK」とか、「メールありがとう」とか、とても一言で済ませることができない。時節のあいさつを考え、無沙汰を詫びて、相手の健康を思い、内容の返事にお礼やら理由やら・・・それをしようと思うと時間もかかるし、気持ちが悪えて、返信が出来ない。すると、「あのね、手紙とメールは全く違うんだから。とにかく一言返しなさい。」と呆れられる。携帯電話の小さな画面でさえも、文字が並ぶと自分の中ではまさに手紙モード。あれこれ文を考えていると、「それなら電話した方が速い。長文はかえって迷惑なんだ。自分だって返事が来ないとどうしたかと思うだろうに。」・・・確かにそうだ。が、その時間が嫌でもない。忙しいのか、体調を崩したか、はたまた嫌われたかな、まあ、もう少し待ってみようと思う時間は心の旅となつて、想える相手がいることの喜びが自分を豊かにしてくれる気がする。(当

然、理解者は非常に少ない。いや、いないかもしれない。)

もちろん、万葉時代の「待つ」には、「連絡がとれない」

「もう二度と会えないかもしれない」という過酷な現実が伴う。柿本人麿は島根県の石見に国司の一員として赴任し、その後、上京のため妻と別れて旅立った。そのとき、「靡けこの山」と山をも退かして妻に会いたい切望を詠んだ歌がある。やがて、妻と別れたまま死に際し、帰りを待っている妻を想い、歌を遺した。鴨山の岩を枕として死のうとしている私を、何も知らずに妻は待ち続けているだろう、と。万葉集では、この歌の次に妻の歌が二首並んでいる。「今日帰るのか、今日だろうかと待っているあなたは、石川の貝に(あるいは、谷に) 交じって倒れているというではありませんか。」斎藤茂吉は実地踏査やその地にある記録などから、執念を燃やして人麿が亡くなった場所を具体的に定めたが、諸説がある。この石川がどの場所をいうのか、死因は病死か刑死か溺死か、妻も石見の人か大和の人か、定かではない。

遠くで聞かされた夫の死。悲しみのどん底にあつても、一つの歌が人の命を救うことがある。歌に励まされ、また、歌うことで想いを伝え、響き合い、生きる力になることがある。万葉集は歌集である。古からどれだけの人がこの歌に励まされてきたのだろう。そして、川の流れがある限り、これからも多くの人に万葉の川心は伝わり、語り継がれていくだろう。また、春が来る。暗闇に居るなら、その手で灯りを点けよう。悲しみの中にあつても、歌い、踊ろう。そして、生きよう。

妻のもう一首、それは次号に続く。

「ぜひ、もうしばらくお待ちください。」



島根県益田市・島根県立万葉公園
人麿呂展望広場・歌碑